

清月記 SPECIAL対談

大沼えり子さんが語る「女性の生き方」

保護司、NPO法人ロージーベル理事長として、犯罪や非行からの更正を目指す少年たちを支援しながら、少年たちの帰る家「ロージーハウス」も休み無しで運営する大沼えり子さん。その原点をお聞きしました。



「いくつになっても素敵に生きましょう」

「活動のエネルギーは、子どもから貰った」

菅原 大沼さんは結婚され、子どもも育てながら保護司として少年の更正など、さまざまな分野で活躍されていますが、そのバイタリティはどこから湧いてくるのですか。
大沼 好きなことは、好き嫌いと言いますが、好き嫌いといふよりも、私の心がこうしたいと思ったことに忠実に従っているだけなのです。心に響いたものに対して何もしていないでいる、心がいつまでも泣いていて、抜け出すには一歩踏み出さないと自分が許せないのです。
菅原 ご自分がやりたいことをやるということだと思いますが、その源にあるのは何ですか。
大沼 私の2人の子どもたちなのです。「この人が母親



菅原 裕典
すがわら・ひろのり
1960年宮城県塩釜市生まれ。83年東北大学大学院経済学部経済学卒業。83年名古屋・中京葬儀社入社。85年3月、父・清一とともにすがわら葬儀社設立。89年仙台メモリアルサービス設立、社長就任。2000年工ボックセんだい設立、社長就任。01年社会福祉法人無量壽会理事就任。01年せんない泉工フム放送取締役。01年清月記社長就任。10年宮城学院中学校・高等学校父母教師会会長就任。

で良かったって」子どもたちに思われたいからなのです。私の活動の原点は、子どもからもらって、育ててもらったと思っています。子どもが小さい時から、あなたはどうかしたいのと、よく聞いていました。自分と子どもの気持ちがあ致したときは、とても気持ちが嬉しかったです。
菅原 子どもは親の背中を見て育つと言われます。親の行動はとても大事ですね。
大沼 私、実はフザコンなのです。それは父は尊敬できる人だったからです。父の立ち位置や考え方は私にはとても神々しく、父から「お前のやっていることは良いことだ」と言われると、とても力が湧いてきて、茨の道に踏み込めたと父の言葉が、私のエネルギーの源です。
こうした幸せを私ほらい

知っているから、更正しようという少年にこの幸せを分けてあげたい、少しでも知ってもらいたい、一助になりたいと思っています。
菅原 大沼さんがこれまでおやりになっていたことを、体験したこと、を基にした映画「君の笑顔に会いたくて」が制作され、今年9月から地元の名取市を始め、全国の公民館など500カ所以上上映されていますね。
大沼 これまで保護司としての体験などを基にまとめた、「この思いを伝えて」や「君の笑顔に会いたくて」の笑顔に会いたくて」の原書を原作として、山田司郎名取市長らが代表委員を務める「制作と上映を支える宮城県民の会」によって、個人や企業、団体からの支援、協賛金を元手に制作されました。
菅原 以前、テレビドラマ大沼えり子 君の笑顔に会いたくて」の原書を原作として、山田司郎名取市長らが代表委員を務める「制作と上映を支える宮城県民の会」によって、個人や企業、団体からの支援、協賛金を元手に制作されました。
菅原 以前、テレビドラマ大沼えり子 君の笑顔に会いたくて」の原書を原作として、山田司郎名取市長らが代表委員を務める「制作と上映を支える宮城県民の会」によって、個人や企業、団体からの支援、協賛金を元手に制作されました。

「人と人とはお互い支えあい、お互い生かされている」
菅原 映画で伝えたいことは。
大沼 一つは更正保護司の体験を基にしていますので、保護司への理解を深めていただきたこと、二つめは、家族のあり方、人としてのあり方、三つめは社会や地域のあり方を考えてほしいからです。人と人とはお互い支えあっているというこなのです。
菅原 実際の撮影地も地元



清月記本社



大沼 えり子さん
おおぬま・えりこ

1957年(昭和32年)3月30日、父大沼幸治さん(元川崎町教育委員長)と満電子(まきこ)さんの二女として宮城県川崎町に生まれる。宮城学院高等学校、宮城学院女子大学家政学科を卒業。作家。
●大学在学中から東京、仙台を中心に司会やシンガソングライターで活躍。28歳で佐竹忠仁さんと結婚、佐竹家の家業で名取市の「割烹いろははや」の若女将として活躍する。2児の母。
●2001年11月から保護司。更生支援として少年の悩みに耳を傾け続ける。2008年NPO法人ロージーベルを設立、理事長就任。少年院にD放送院内放送カントリーボーイ)を通じエールを送りながら、2011年1月から少年達の帰る家「ロージーハウス」を常勤で運営、更正に向けた生活援助を行っている。法務大臣表彰に続き10月13日には文部科学大臣表彰を受けた。宮城県教育委員会教育委員も務めた。

地域と共に
仙台七夕まつり 観賞
仙台青森まつりすずめ踊り参加
どんと祭 参り参加

清月記グループ

宮城県内で行いましたね。
大沼 私が世話話になり関わった地域でない、思いが薄れますので、育ててくれた名取、岩沼市域の保護司会、仙台は外せませんし、生まれたい川崎町、巨理町などで撮影しました。

菅原 保護司の活動をテーマにした映画は初めてですね。ところで、大沼さんが2001年から保護司になろうとしたキッカケは何だったのですか。
大沼 私の息子が小学1年生の時の友人が、窃盗の疑いをかけられたのがキッカケでした。疑われた少年は中学生になっても非行を重ねました。私が窃盗を疑い、彼を傷つけてしまったことに非行の原因があると悩み続けて、息子は抗議を受けていました。そうした中で保護司の話が舞い込み、保護司になるこ

とを子どもたちが背中を押ししてくれたのです。
「次は全国初の少年たちの自立援助ホームを立ち上げたい」

菅原 大沼さんのユニークなところは、少年院の少年たちに院内D放送「カントリーボーイ」を通じてエールを送り続け、2001年から、全国でも初めて、少年たちの帰る家「ロージーハウス」の運営を続けていることです。
大沼 保護司として少年更生支援で少年たちの悩みに耳を傾けている中で、少年院で更正に頑張っているある少年から手紙が届きました。この少年は、充分社会復帰ができるにも関わらず、確固たる引受人や引受け先がないため退院時期が1年経過しても出陣できずにいました。家族がおらず、社会に戻っても誰も頼る人がいなかったのです。

大沼えり子
この思いを伝えて...
子育てよかった物語
君の笑顔に会いたくて
ガラスの牙
糸
この思いを伝えて...
君の笑顔に会いたくて
ガラスの牙
糸

この時、仮退院できないでいる少年が他にもいることを、初めて知りました。
さらに、虐待やいじめを受けている少年たちが増えている状況を目にして、少年たちの居場所、彼らの帰る家を作りたいと、ロージーベルを設立、少年の家立上げに着手して、毎月1回1時間の番組のDJ放送を続けながら、運営をしています。ここでは東日本大震災直後から、家庭裁

判所からの依頼を受け、親元に帰れなかった少年たちを受け入れています。
少年たちは100%家庭や家族に恵まれます、そのうち20%は虐待を受け家庭崩壊しています。幸せを知らないうことが、お腹から笑ったことがなかったのです。ロージーハウスに帰ってきたときには、「お帰り」と言われて迎えます。頭をなでてあげると、私も安心します。今は、厚生労働省管轄の自立援助ホームとしての立ち上げを準備しています。少年では全国初です。
菅原 最後に将来を担う女性のためにメッセージを。
大沼 いくつになっても素敵に生きよう。
菅原 今後もご活躍を期待しております。